

シリーズ
「景観文化考」第1回

S E R I E S

風景の記憶

L A N D S C A P E



中井 和子 (なかい かずこ)
中井景観デザイン研究室 代表

東京出身。筑波大学大学院環境デザイン専攻修了。(株)G.K.インダストリアルデザイン研究所(東京)勤務を経て、1975年～78年フランス政府給費留学生として、マルセイユ及びパリの国立美術大学で建築・環境デザインを学ぶ。1985年建築・環境デザインの研究所を設立し現在に至る。北海道教育大学・札幌市立大学・北海道工業大学の非常勤講師、「まちの色彩作法」(共著)・「北のランドスケープ」(共著)など。

若い頃、鉄道のユーレイルパス[※]を使って1カ月間ヨーロッパを周遊した。パリを起点にドイツを経て、デンマークで列車ごと船に乗ってスウェーデンに渡り、再度、列車で走ってストックホルムを経てノルウェーのベルゲンまで北上し、フィヨルドを遊覧した。ここまでに1週間が経過する。次は途中下車しながらゆっくりとヨーロッパを南下し、オーストリアのザルツブルグとウィーンに立ち寄ってからパリへ戻り、2週目が終わった。今度は、パリから大西洋沿岸をスペインまで行き、地中海側のバルセロナまで横断する。地中海沿いに南フランスを通過してイタリアに入り、アジジヤローマ・フィレンツェで寄り道してからヴェネチアまで走った。まだ、新幹線の類は通ってない時代で、最後は、長距離の夜行列車でパリまで一気に戻り、1カ月分きっちりとユーレイルパスを利用した。当時、ドイツは東・西に分断されていて、東欧諸国と島国のイギリスへは行くことができなかった。途中で下車し宿泊したのは、YWCAやユースホステルなど、低料金の宿泊施設だったが、若者の貧乏旅行や家族づれ、熟年夫婦など、世界各国の旅行者でにぎわっていた。

短期間ではあったがヨーロッパ諸国を外観したこの旅の体験が、後日、私が都市や農村の景観を考える布石になったと思う。国境を越えるたびに、車窓から見える風景の変化に大変感動したが、それ以上に、風景が形成される背景には多種多様な要因が介在することを認識する機会でもあった。自然や地形などの地理的条件はもとより、地域に蓄積された歴史や文化の重みが伝わってきた。また、類似の歴史・文化が存在する領域は、国境の境界線よりも民族や昔の支配領域に根源をおく場合が多く、長い歴史的経過において国境が度々変化していることも、風景の様相から読みとることができる。風景とは多くの場合、国や行政の施策が作り出すより、地理的要因と歴史・文化に裏付けされた人々の生活・産業の営みが創出することを認識した。

ヨーロッパの人々にとって、風景とは心の記憶やふ

※ユーレイルパス

ヨーロッパ以外の居住者を対象に、ユーレイル加盟国の鉄道を限定期間内は乗り放題で利用できる周遊バス。いろいろな期間がある。

るさと意識を蘇らせる事象であり、地域文化の存在を確認する証となる文化的アイデンティティーなのである。都市や農村の景観形成に対する造詣の深さと、法的整備へのこだわりと意志は、記号化された風景のアイデンティティーの喪失を恐れるからであろう。都市や地域の開発ではスクラップ・アンド・ビルドが当たり前の日本人と比較すると、景観保全に対する意識の違いは極めて大きいと考える。教会や塔など大規模な建築物は、景観のランドマークとして地域のシンボリック存在であるが、同時に、住民の生活文化や暮らしの場の核心を構成する。身近な景観資源の価値に気づき、使い込んだ普段着の景観への愛着と誇りを、街の風景のたたずまいのなかに読みとることができる。

「景観」とは、眼前に繰り広げられる自然と人間の生活・生産の営みの総合的見え方である。そして、日々の生活の景色が蓄積され、時間の経過とともに「風景」へと昇華されていく。我々は風景の中に凝縮され記号化された地域資源を確認し、思い出に浸りふるさとを懐かしむことができると考える。しかし、日本では多くの場合、過去の古くさい物は一掃してから、新しい建物や環境が建設される。風景の中に歴史的な文脈を確認するのは、都市空間において容易ではない。「風景の記憶」の喪失である。

ヨーロッパの景観法の多くは、現況の美しい街並景観や自然豊かな農村景観を、保全・継承する整備手法として検討される場合が多い。例えば、フランスの景観整備の手法は、歴史的建造物とその周囲の建物群のあり方、土地利用と景観の関係、遠景から街を見る眺望景観、自然と農村と都市との相互関係など、空間的・領域的に地域にふさわしい景観保全を要求する。地域

の歴史的・文化的要素を共有財産と考え、時間の文脈を確認できる景観形成である。地域で暮らす人々にとっては、街や地域を乱開発から護り、住み慣れたふるさとの風景を保全する制度と理解される。その結果、地域の魅力ある景観が保全され、観光客や旅行者が訪れる景勝地が形成される。ヨーロッパの中山間に立地する町村では、「身の丈に合った」という言葉をよく耳にする。町や集落のスケールに合った開発や観光のあり方を指摘しているが、地域住民の生活文化の継続性へのこだわりがまちづくりに反映され、小規模だが美しい景観形成に帰結すると考える。暮らしの文化が息づく景観は、旅行者にとっても魅力がある。

平成16年に「景観法」が公布され、日本でもようやく景観に対する市民意識が高まってきた。景観形成に必要なのは、計画や条例の策定だけでなく、町や地域の景観的価値に住民が気づき、意識の共有化を図ることである。北海道は歴史がないから、ヨーロッパや日本の古都のような優れた景観がないと言う人が多い。しかし、歴史や趣ある景観形成の始まりは、毎日の生活の積み重ねからである。嘆くより実践していくことである。北海道には、豊かな自然と広い空と大地、開拓使やアイヌの固有の歴史・文化など、道外の地域とは異なる地域資源が存在する。貴重な「ふるさと資源」の価値を再確認し、日常の生活・生産の活動を通してまちづくりに活かしていける、地域の人材育成から美しい景観形成は始まると考える。

昨今は「地域力」なる言葉が使われる時代となった。シリーズ『景観文化考』で、身近な視点から「景観・デザイン・まちづくり」について、皆さんと一緒に考えていきたい。



※写真撮影：筆者